

# さわやかカバン情報

発行元 十島村教育委員会

〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号 099-227-9771

E-mail toshima-ky@tokara.jp

## 一隅を照らす十島の教育

### 五月～紅(こう)ほのか

十島村教育長 原口 英典

ある講演会で聞いた少し気になる話。  
「この前、学校に用があって電話をかけた。電話を取られた先生の受け答えに大いに違和感をもった。先生方が忙しいのは理解している。しかし、いかにも面倒くさそうな態度が声のニュアンスで伝わってくる。電話をとった方は、学校名も名前も言わず、『用件は?』というような対応である。これで子どもたちの人格形成に参与しているかと思うと不安になる。電話対応すらできない人が、何が教育か。また、学校に行ったとき、こちらからあいさつしても、背を向けたまま、あいさつの返せない先生がいる。そうでない先生ももちろんいるが・・・。」

昔ある学校での出来事。五月は修学旅行の時期。学年主任が、生徒たちにある子の作文を紹介していた。  
「私が教師になりたての頃、ある中学生が次のような作文を書いていたのを読んだことがある。それは、・・・」と言って話されたのが、次の内容だ。

「待ちに待った修学旅行が目前に迫りました。旅費も母が内職して工面してくれましたし、服も靴も取り出し、持ち物の用意もすっかり整えて、うれしさに浸っていました。」

ところが前日になって、私の気持ちは喜びから悲しみへと急に変わったのです。『木村さんのカバンはどんなの?』私の旅行カバン、それは数年前に亡くなった父が、残していった古ぼけた、黒くてところどころ破れている男物のカバンでした。その晩私は母にねだりました。母は『お金がないのよ、辛抱なさい。』の一点張りでした。

『たった一人の娘が、晴れの修学旅行に行くのに、お母さんのバカバカ……。ああ、お金持ちの子に生まれない。』涙がとめどなく流れました。こんな修学旅行を何年も前から楽しみにしていた自分が馬鹿らしく思われました。・・・

車中で、『木村さん、お菓子食べようよ。』の声にハッと我に返り、仕方なくカバンを開けてお菓子を取り出しました。するとカバンの中に一枚の封筒が入っていました。いぶかりながら封を切って中に入っていた

一枚の便箋を取り出しました。  
『芳子さん、あなたにはお母さんはすまなく思っています。あなたにどんなにか新しいカバンを買ってあげたかったです。でもどうにもならなかったのです。だから心からお詫びします。あなたがつらいだろうと思うので駅へは見送れません。家の窓から車が通るのを見送ります。同封の200円は小遣いの足しにしてください。お母さんにはこれだけが精一杯です。』・・・」

この学年主任が生徒に伝えたかったのは・・・。

高浜虚子の句に

白牡丹と いふといへども 紅ほのか  
というのがある。真っ白一色に映るその牡丹の中に、見るとわずかに赤みがかかった色が見えるというのである。

「見るは観るなり」とも言われますが、上記の例話は、「私たち教職にあるものの姿は、よくよく観られてもいるという自覚と、また、子どもの心や保護者の思いを観る(読み取る)ことの大切さ」を改めて教えてくれる。

### 【村小学校連合修学旅行思い出いっぱい】

中学校と隔年ごとに行われる小学校連合修学旅行は、



5月8日(火)から12日(土)の日程で行われました。池邊貴康団長(中之島小中学校長)をはじめ9人の先生方の引率のもと、小学校5年生6人と6年生7人計13人は、フェリーとしまの英断で宝島折り返し便で、9日未明に鹿児島に入港しました。船中泊後、その日は、水族館や黎明館、県立図書館を見学することができました。

10日(木)・11日(金)には熊本城、田原坂資料館、グリーンランド等を計画どおり見聞して、楽しい思い出をつくることができました。結団式・解団式でも、小学生らしいしっかりした態度で抱負や修学旅行の成果を発表していました。

11日(金)出港のフェリーとしまで全員元気に帰島しました。

### 【村中学校連合交流学習盛会裏に!】

修学旅行と隔年ごとに実施される中学校連合交流学習は、5月17日(木)と5月18日(金)の両日、



村内7校の1年生から3年生16人に、浜田勝也会長(宝島小中学校長)をはじめ9人の先生方が引率して日置市日吉町の会場などで行われました。

17日(木)の午前中は、日吉中学校で大勢の友達と全体交流会、各学級での教科学習、生徒会主催のレクリエーション、給食・お別れ会を通じて楽しく交流学習をすることができました。村の中学生の自己紹介や発表の立派さに日吉中の生徒や先生方も感動したとのことでした。



午後は、日吉総合体育館で、卓球・バドミントン・ソフトバレーのゲームで競い、仲間づくりと体力づくりに励みました。

18日(金)は、城西高校、育英館高校、鹿児島実業高校を訪問して、各学校の様子を見聞し、貴重な進路学習をしました。



同夜出港のフェリーとしまで全員元気に帰島しました。

### 【田知行さんからカーネーション】

今年も本名町で生花店を営む田知行義久さんから「母の日」用のカーネーションが、5月11日(金)本村小中学生全員に贈られました。今年で30回目。

受け取った小中学生は、お母さん方にプレゼント。お母さん方は、毎年のプレゼントに大感激。「各学校からの心のこもったお礼の手紙が楽しみで続けたい」と、田知行さん。毎年の御好意に感謝いたします。

### 【鹿児島教育事務所長 全島訪問】

平成24年5月22日(火)出港のレントゲン(住民検診)便で、4月着任された鹿児島教育事務所の緒方玲子所長をはじめ、指導課長、指導主事、総務課主査の4人の先生方が、村内全小・中学校を視察されました。

御指導や激励をいただく中、各学校の確かな活動や子どもたちの様子に感銘を受けておられました。

### 【平成24年度 啓発活動重点目標】

「みんなで築こう 人権の世紀」

～考えよう 相手の気持ち

育てよう 思いやりの心～

### 【子どもたちの作品】 (南日本新聞「若い目」 <H24.4.4>より)

#### 祖母の「自誌」

口之島中学校 現2年 永田 征也

僕には85歳の祖母がいる。ある日、祖母から「これを読んでみて」と、「自誌」を渡された。そこには、祖母が14歳で大阪に出稼ぎに行き一生懸命働いたことや、口之島の戦時中、アメリカ占領前後の暮らしなどが書かれていた。

戦時中は、口之島に見張り所ができて、日本兵のために水や食料を運んだり、不時着した日本兵を島民で介抱したりとあった。僕は、大変な生活の中でも、兵士を介抱する島民の優しさ感動した。

敗戦後、北緯30度線以南はアメリカに占領されたが、「アメリカ兵は食料や服をくれて、うれしかった」とある。僕は敵国から物をもらうことをうれしく思う祖母の心に疑問を持ったが、それだけ生活が厳しく、生きるのに必死だったからこそ、素直にうれしいと感じたのではないかと思った。

僕は、「自誌」を読んで、祖母の苦勞が痛いほど伝わってきた。また、「自誌」には僕の誕生や成長を喜ぶ内容もあった。僕を見守ってくれている祖母の思いをあらためて知り、胸が熱くなった。

投稿時の学年は1年です。

### 十島村の小・中学校からのメッセージ 宝島小・中学校

教頭 寺田 洋二郎

本校は、私自身未経験の「小学校」との併設校であり、指導方法や校務全般のことなどで戸惑いを感じたことはありましたが、それ以上に、小中併設校の勤務を通して、教育の奥深さを垣間見ることができました。この経験は、教師としての今後の自分の幅を広げてくれるような気がしています。

赴任前は、物の少ない生活への不安は正直大きかったです。好きな時に好きな物が買えない生活への変化に対応できるか心配もしましたが、おかげで、物が簡単に手に入らない生活ゆえに味わえる「ありがたさ」や物があふれる現代社会の課題等も感じられるようになってきました。当然そんな生活の中で不便さを感じることは全くありません。

極少数の子どもたちが相手ですので、子どもは常に教師を見ています。自分自身の教育への姿勢が直接子どもたちに反映されやすいという点ではとてもやりがいを感じられる環境といえます。もちろん逆の可能性も秘めていますので、真摯な姿勢で教育に臨んでいるか常に自分自身を省みながら日々の生活を送ることの大切さを痛感している毎日です。

### 【教職員仲間である「あなた」へのメッセージ】

教師として、あるいは人間として、自分自身をもっと磨きたいという向上心は教師の誰もが持っていると思います。その向上心を充足させてくれるものが、ここ十島村の教育にあると確信しています。

是非、多くの方がこの十島村を希望して赴任されることを願っています。